

「個人主義からの逃避」を讀む

作品成立の背景 へ昭和三十三年「文壇」一月號

恒存は昭和三十三年九月に於いて欧米に滞在及び各地を歴訪した。この経験は、その後の恒存の多彩な活動に大なる刺激となった様だ。

彼は帰國途上、飛行機の中で、今後の仕事、進め方について、深く考へてみたと言ふ。彼の昭和三十三年の行動及び著作を、全集第七巻の年譜で確認すると、その圧倒的なエネルギーに、それだけで感嘆し、頭が混乱してくる私には、恒存による分類は大変有難く思はれる。

- (1) 自分の本業に書きたいことだけを書く
- (2) シェイクスピア劇の翻譯と演出

- (3) 具體的・あるいは時事的な問題の提出

①日本の知識人々の考へ方に根本的な疑問を呈すること

②國語改良の似非合理主義に反対すること

③戦後教育の精神を卻けること、教課・教科書・制度など具體的な問題を通じて論ずること

右の様に分類した上で、この(1)(2)(3)の關係について説明してみよう。(1)と(2)は「私」かつぎだした「神樂」であつて、(3)は

その「神樂」から通りを練り歩きやうい様にするため、交通整理の役を果たすのだと言ふ。なるほどなる。さういふことが、納得させられるわけないか。恒存はよく「独断・専行」で行動する文士なのだ。いや、さうせざるを得ないのが「近代化適応果敢」を患ふ日本といふ國の眞の知識人たる恒存だ。たと言へるのだらう。

この「個人主義からの逃避」は、(3)の①に属すると思ふ。

「平和論の道めう」についての疑問「日本及び日本人」「自由と唯物思想」「戦争責任といふこと」などの良く知られてゐる評論に續く作品である。日本の文藝批評家の思考的立場を論証すべく、どこまでも理詰め、考へ抜くといふ、女流が書いた作品である。

一、文學史的方法の問題

- ・ 個々主義とは近代西欧市民の精神的基調をなすもの

- ・ 日本の近代文學史は個人主義の成立と挫折の歴史であった

近代日本文學が個人主義を身につけたるか？ ということ

←

明治以來、つねにその古典的源泉として受け入れてきた
西欧の精神と文學をついに消化しえなかつたことを意味する

- ・ この近代文學成立不能の事態についての

ある程度の一般的解説

←

社会的・経済的条件から個人主義挫折を説明しようとする。

これは唯物史觀に基づく方法だ

←

文學史上の作家や批評家の言葉を通じて 彼らの
精神や時代を理解する。 といふのは

思想的怠惰からくる あやまる だ

- ・ 作家が主體で當時の現實が客體ならば 批評家は その
作家の主體をも客體として扱はねばならぬ

- ・ なせ日本に西欧風の近代文學がでえなかつたか
なぜ個人主義文學が成立しなかったか について

主體の側から考察せねばならぬ

- ・ だが 東西の問題は

「まねようとしたのに、なぜこれなかつた」のはなぜか である。

二、近代西欧文學における 孤獨感

- ・ 個人主義とは「その思想も帰結も孤獨」といふ觀念にある

孤獨。這を背負って出てきた寂しい思想

孤獨のふところに堪へるための生き方

- ・ 個人主義は近代文學の始まりである。ロマンティスム運動から
芽ばえ、自然主義文學から二十世紀初頭の文學へとつづいて

・近世

明るい個人主義

健康なロマンティズム

・ルネサンス期

シテ・ソフ・の悲劇や史劇

ハムレットやマクベスの孤獨

其背後に忍びよる歌へもろくぬ孤獨

創造者としての作家との間に

一人二役・二一人二役の關係成立

創造者の意識と無意識

創造者の意識と無意識

孤獨と存在の證明と

分離と構成といふ美学的アイロニー

・近代

暗い個人主義

病的なロマンティズム

ロマンティックの詩人たる

孤獨を前面に押し出し歌ふ

孤獨感の共通の紐帯

←

十九世紀の自叙伝的

小説家たる

トルストイ

ドストエフスキ

スタニスラフ

分離と構成といふ美学的アイロニー

美学的原理の復原

分離した孤獨感の

再現した

三 實感といふこと

・「實感」依據 ↓ 「唯物的」「即物的」

日本人的思想の態度

自持 ↓ 「實感」依據 ↓ 「觀念論」×

唯物的「實感」依據に徹底

左翼思想の作家 ↓ 「唯物論」×

日本人の唯物的生活態度 ↓ 「唯物論」と
なると「觀念的」になつてしまふ

自叙伝的文章 ↓ 「觀念的」實感に
おきかへる

・「實感」依據が根本に

あつては西洋近世の

「孤獨感」は感じられは
しない

四 剥落の過程

・日本に自らの文藝史

内輪をまひに目か向いてゐる

西洋の個人主義も、孤獨感も器用に流れて、主感的な気分をうてに解消せしめられた

自持から新環境から新感を受け、戦前の藝術派

孤獨感を底に持たない外見上の個人主義は、挫折への過程ではなく剥落の過程をたどつたといへる。

・西郷従道の小説

「吾輩は日本人である」 戦前の個人主義を記したため

個人主義が偽装であり剥落をまねかれた
とはいへ、個人主義挫折という虚偽の歌を歌ひつづける
「吾輩は日本人である」

・戦前思想の文藝

個人主義を身につけてゐるという前提にたつた

孤獨感を避けて通りうる手帳に

「社会性」といふ護身符を用ひてゐる。

「社会性」といふものの、社会的な性格のため、

剥落したといふ。

はじめる個人主義をちかつかつたといふ、

たゞにほかにしてしまふ

個人主義の合はぬ風土ゆゑに、個人主義とすといふ

「社会性」といふ、制度の

解決法が、暫く利かすのだ

・戦後思想の文藝

「唯物論」も必要に、徹底的な性格をこける

戦後思想が、戦前思想を救ひかくるといふ、気分の信仰のまゝに

個人主義が成立するわけがある。

五 日本—メケ文

・ 西歐文學の発想に救ひといふ觀念はない

救ひのない 孤獨感こそ 文學の場所

救ひは神のたまひだ

・ 日本における文學の在り方は 明へておれば 救はれる
「氣分的信仰」をいふは 宗教としてである

個人主義の持主といふ文學の史的常識のうちに

「時代背景の理解」とか「市民社会成立の基」とか

外部的に説明づけられ 片のつかぬ問題があるのだ

←

神々しい日本、絶対神を必要としなかった日本人、さういふ
主體の分析にまで迫らねば とうにもちぬ

その所しえたもうで とうるるといふもたないか
その自覚のうちに 近代文學、近代精神を論ずるも
混乱を招く、救はるる、すべては無意味

個人主義の持主といふ、民権主義、自由、平等にしても
すべてが神の問題と結びつく

もう一度 明治の精神に立ちかへてみる必要があるのか
その必要の裏面からいふことが必要かありはしないか

諸感

「日本近代文學」は「西洋近代文學」をまねたとして まねられた

それゆゑの問題と第一章で述べてゐる。この問題提起には
文學関係者は 異議を申し立てた（32巻時）

それだとして 恒常の提言は少しでも実践されたか
私は日本の現代文學の状況が分かる、今日の社会は

〇〇節・××節を確立し得る作家が 存在しなくなる、こ
るゝのではなないか、日本人の氣分的信仰は何を聲明として
ゐるのだろうか、相対主義の混濁は ますます深刻に
なつてゐる、安直に救ふ」といふ、認識すべき時が来たか。